



Title	動乱期におけるコサック・イメージ : M. ザゴスキン『ユーリー・ミロスラフスキー, あるいは1612年のロシア人』を例に
Author(s)	上村, 正之
Citation	研究論集, 16, 33(左)-52(左)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.l33
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63908
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_005_uemura.pdf



動乱期におけるコサック・イメージ

— M. ザゴスキンの『ユーリー・ミロスラフスキー、 あるいは1612年のロシア人』を例に —

上 村 正 之

要 旨

本稿の目的は、M. ザゴスキンの『ユーリー・ミロスラフスキー、あるいは1612年のロシア人』(1829)¹におけるコサック・イメージを考察し、先行研究の中に位置付けることである。文学上のコサック表象を論じた先行研究では「神話」という概念を用いて、ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』が持った影響力の強さを論じている。『タラス・ブーリバ』と違い、ウォルター・スコット風の歴史小説である『ユーリー・ミロスラフスキー』の場合、ロマンチックなコサック像と、歴史的知識に基づいたコサック像の2種類が現れる。前者がザポロージェ・コサックのキルシャであり、受動的な主人公ユーリーに対して、アグレッシブな行動力により彼を積極的に助ける。ユーリーとキルシャが合わさることで、一種の理想的なロシア人像が描かれるが、キルシャはコサックの中では例外的な存在であると説明されており、コサックそのものは讃美されるべき対象として描かれていない。一方でキルシャ以外の歴史記述に基づいたコサックは、利己主義を特徴としており、ロマンチックなコサックを相対化している。こうした要因により、この作品ではゴーゴリ的なコサックの「神話」性は力を持ちにくくなる。

はじめに

コーンブラット(1992)はロシア文学上のコサック像を研究した著作において、19世紀のプー

¹ 本稿で用いたザゴスキンの作品のテキストは、以下のものによった。

Загоскин, М. Н. Юрий Милославский, или Русские в 1612 году // Сочинения в двух томах. М., 1987. Т.1. С. 35-286. 以下テキストからの引用ページを () 内に記す。

シキン、ゴーゴリ、トルストイ、20世紀のバーベリ、ショーロホフの作品を分析している。彼女がコサック表象を論じる際に用いるのは、初期のロラン・バルトの著作から借用した「神話」という概念である。彼女によれば、19世紀初頭より、文学を通じてロシア文化の中にコサックの神話が生じたという。「神話は、雑多でしばしば矛盾する現実の要素を削減し、純化する」² ゆえに、個々の作品や時代を超えて、共通のコサック・イメージとして作品に現われる。

さらに、コサックの「神話」は、矛盾する要素を超越し、両義性を獲得することを特徴とする。例えば、コサックはロシア人にとって「自己」でありながら「他者」であり、「善」でもあり「悪」であり得る。神話的コサックの例として、コーンブラットが特に注目するのがゴーゴリの『タラス・ブーリバ』(1835、但し1842年に大幅改定)である。このウクライナのザポロージェ・コサックを題材にした作品において、ゴーゴリは故意にロシア人、ウクライナ人、コサックの境を曖昧にする(自己/他者)³。コサックはポーランド人・ユダヤ人に対して苛烈な残忍さを見せるが、ゴーゴリの視点はコサックたちの側に留まり、彼らを非難することは決してない(善/悪)。むしろ暴力性は、既存の道德規範を越えた「境界性 (liminality)」を露わにし、コサックに半神的なオーラを添える。コサック神話は「ヨーロッパ/アジア」の葛藤に苦しむロシア人に、肯定的な自己イメージを与えてくれる。なぜならロシア人はコサックと同じく自由であり、西欧文明に欠けている調和性と高い精神性を持つからだ⁴。

彼ら<ロシアの作家たち>は、ウクライナ、ドン流域、コーカサス、ウラルに15世紀から20世紀まで生きてきた<コサックの>歴史的人物たちを、単一の魅力的な、鼓舞するような自己定義の神話に事実上変えてしまったのである⁵。<> 内筆者補足

このような対立物の包含、地域性・歴史性の超越を特徴とするポジティブな神話的イメージは、カフカスのコサックを描いたトルストイの『コサック』(1862)にも現れるとされる。コーンブラットはゴーゴリが確立したというコサック神話をベースに、続けて20世紀のバーベリ、ショーロホフといった作品を分析している。

コーンブラットが個々の作品の舞台を越えた「神話」性、あるいは共通性を指摘したことは重要である。しかし、それがどれほどの浸透度で受容されたのかが問題となる。つまり、知識人たるロシア人の作家は、コサックの「神話」に魅せられただけでなく、必ずしも肯定的ではない「現実」のコサックに対する冷静な眼差しも保ち得たはずだ。例えば、19世紀のカフカス

² Judith Kornblatt, *The Cossack hero in Russian literature: a study in cultural mythology* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1992), p. 4.

³ *Ibid.*, pp. 43-49.

⁴ *Ibid.*, pp. 13-20.

⁵ *Ibid.*, p. 19.

を題材にした文学作品について、スーザン・レイトン（2001）は次のように述べる。

カフカスの文脈では、ロシア人の想像力におけるコサックの伝説的雷鳴の大部分を、部族民が盗みとってしまった。ロシアの国境守備兵として厳密に概念化されたコサックは、完全なる「自由な人間」としての魅力を失ったのだ⁶。

ロシア最南端のフロンティアにおいては、カフカスの非ロシア系の部族民や壮大な自然が神話の担い手になる。一方で、過去の「自由な」集団から、ロシア帝国の軍事階級として定義された19世紀のコサックは、同時代を舞台にした作品ではもはや「神話」的イメージを保つことは困難になる。

同様に、「神話」が力を持ちづらくなるのが歴史小説であった。このジャンルはフィクションでありながらも、対象は特定の時代・地域であり、程度の差こそあれども歴史的忠実さが要求された。コサックとは単にロマンチックな存在ではなく、ロシアの歴史に生々しい痕を残した集団でもあった。それゆえに、歴史小説の作者は特定の過去を再現しようという志向と、文学的想像力がせめぎ合い、作品内に多様なコサック像が生じることになる。

ところで、ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』も歴史小説の一種なのだが、彼が「神話」と呼ばれるイメージを作りだせたのは、彼の史料に対する考え方が大きく影響していることが指摘されている。彼は史実の厳密性よりも想像力を重視し、歴史歌謡や友人から得た情報で創作することを好んだ。彼の歴史観は作品集『アラベスキ』（1835）における論文『小ロシア形成の概観（Взгляд на составление Малороссии）』や、『小ロシアの歌について（О малороссийских песнях）』に見ることができる⁷。実際、『タラス・ブーリバ』の舞台はウクライナの16～17世紀であるが、特定の年代を描いてはいない。

本稿の目的は、歴史小説に注目し、先行研究の「神話」という視点を相対化することである。具体的には、M. ザゴスキンの『ユーリー・ミロ斯拉フスキー、あるいは1612年のロシア人』（1829）を考察の対象にする。この作品はコンブラットの研究で取り上げられてはいないが、後の『タラス・ブーリバ』等と共通するザボロージェ・コサック像と、作者が1612年の歴史から再現しようとしたコサック像が現れる。こうした作中のイメージを、先行研究の中に位置づけていく。

『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』は当時ヨーロッパ中で人気を博したウォルター・スコット風

⁶ Susan Layton, “Nineteenth-Century Russian Mythologies of Caucasian Savagery,” in *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700–1917*, ed. Daniel R. Brower and Edward J. Lazzerini (Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 2001), p. 90.

⁷ Kornblatt, pp. 41–43.

の歴史長編小説であり、ロシア文学に近代的な歴史小説というジャンルをもたらしたと評されてきた。例えば、ペリンスキーは1843年に次のように述べている。

『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』はその当時には、全くなんの疑いもなく、気持ちのよい、注目すべき文学上のあらわれであった。この小説で活動している人物たちはロシア名であるばかりでなく、ロシア語で話し、ロシア風に感じ、考えさえている。これは、その頃、ロシア文学における全く新しい現象であった⁸。

一方で、この作品の人気や影響力に反して、内容の思想面に対する評価は芳しくなかった。作品における、「社会的・道徳的観念の極端な一本調子、複雑な哲学的問題の解決において前面に出てくる説教癖、公定的な愛国思想」、「『困難な考え』と向き合う際の不躰さ」は批判の対象になった。しかし、そうした欠点は「同時にザゴスキンを30-40年代に読書を始めたロシア社会層の間で最も読まれた作家の一人にした」と評されている⁹。それゆえ、広い社会層に読まれ、後の文学の方向性に与えた影響力を考慮すれば、イメージ研究の対象としてはふさわしいと思われる。

本論で扱う中心となるのは、主人公ユーリーと共に行動するザポロージェ・コサックのキルシャと、その他の無名のコサックらの描写である。但し、物語の特徴を明らかにするために、まずは主人公ユーリーについて考察したのち、コサックに視点を移してゆく。

1. 作者について¹⁰

ミハイル・ニコラエヴィチ・ザゴスキンは(1789-1852)はペンザ県のあまり裕福ではない貴族の生まれで、13歳からペテルブルグで文官として勤務を始めた。1812年の祖国戦争では愛国心から義勇軍に士官として参加し、戦場で負傷した際には聖アンナ3等勲章を与えられた。おそらくこの体験が、彼の『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』や、『ロ斯拉ヴレフ、あるいは1812年のロシア人』(1831)における愛国的な空気に影響を与えたことが推察される。当時としては珍しく、詩をほとんど作らず、劇作家、特に喜劇作家としてデビューしたことは注目に値する。

1814年に『いたずら者(Праздник)』を書き上げ、翌年帝室劇場のレパートリー演目を担当していた当時の有名劇作家A. シャホフスコイに才能を認められる。1827年から29年にかけて『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』を執筆するまでに、喜劇を中心に多くの劇作品を手がけた。こ

⁸ ペリンスキー(森宏一訳)『ペリンスキー著作選集 I』同時代社、1987年、244頁。

⁹ А. Песков. Михаил Николаевич Загоскин // Сочинения в двух томах. С. 11-12.

¹⁰ Там же. // Сочинения в двух томах. С. 5-9.

の作品は彼の存命中だけでも 8 版を重ねるほどの成功を収め、後に 6 か国語に翻訳された。この成功により、モスクワ劇場の監督官に任命される。1831 年に、ナポレオン戦争を題材にした歴史小説、『ロスラヴレフ』を発表するが、前作ほどの成功は収められなかった。その後も旺盛に創作活動に取り組み、生涯で 8 つの小説と 20 以上の喜劇、中篇を残した。

2. あらすじ

動乱期の末期の 1612 年 4 月、ポーランド軍がモスクワを占領していた時代を背景に、青年貴族ユーリー・ミロスラフスキーの遍歴を描く。彼は愛国心、正義感、善良さといった徳を持つ若者だが、2 つの困難が彼を苦しめる。1 つは、ルーシを混乱から救うためと信じて、ポーランド王子のヴラディスワフに宣誓し¹¹、外国人の支配を受け入れたこと。もう 1 つは、かつてモスクワで見た見知らぬ貴族の娘に恋に落ち、彼女と引き離されたことである。後にこの娘がポーランド派の横暴な大貴族シャロンスキーの娘、アナスタシアだと知ってユーリーの苦しみはさらに深まる。

第一部：モスクワのポーランド貴族の伝令として、ユーリーは召使のアレクセイを連れて大貴族シャロンスキーの館へ向かう。途中で吹雪のなか行き倒れていたザポロージェ・コサックのキルシャを救い、キルシャは旅の仲間に加わる。ユーリーは、ロシア人を蔑み、我が物顔で支配者として振る舞うポーランド貴族や、シャロンスキーの領地における農民への迫害を目にする。宴会の席では決してポーランドのために乾杯しようとしないうーリーに、シャロンスキーは侮辱を覚える。ユーリーはヴラディスワフへの宣誓を後悔しつつも、それを最後まで貫こうとする。

第二部：ユーリーは、ニジニ・ノヴゴロドへ民衆の騒乱を鎮める使いとして派遣される。ここでは、クジマ・ミーニン¹²が愛国的な演説でルーシの解放とモスクワへの進軍を叫び、ユーリーの心はさらに乱れることになる。街の貴族らのモスクワ進軍の是非を問う会議において、ユーリーは伝令として、ルーシの平和のためにポーランド王子へ服従せよと説くが、非難を浴びる。その場に貴族に混ざって出席していたクジマ・ミーニンは、ユーリーに本心を尋ねる。ユーリーは、祖国の救済を願う心の内を吐露し、誓いゆえにルーシの解放のために共に戦うこ

¹¹ 1610 年 7 月、モスクワでクーデタがおこり、ヴァシーリー・シュイスキーが廃位され、代わりに七人貴族会議が成立する。1610 年 8 月、彼らはモスクワにポーランド軍が進軍した際に協定を結び、ポーランド王子ヴラディスワフが正教に改宗のうえ、ツァーリに即位することになった。ロシアのポーランド支配は、1612 年 10 月にポジャルスキーら第二次国民軍がクレムリンを解放するまで続くことになる。

¹² ニジニ・ノヴゴロドの商人。1611 年 9 月に第二次国民軍の結成を呼び掛け、ポジャルスキー公と共にモスクワ解放に向かった。

とはできないが、セルギイ大修道院で僧になり祖国の解放を祈ることを涙ながらに宣言する。この発言は出席した貴族を感動させる。しかし、その日の晩に召使のアレクセイ共々、何者かに襲撃されてしまう。

第三部：時間は4か月後の8月に進んでいる。一命を取り留めたアレクセイはキルシャと再会する。キルシャは襲撃者がシャロンスキーの刺客だったことを知り、監禁されていたユーリーを救出する。ユーリーはセルギエフ修道院を目指し、そこで著名な修道僧アヴラーミー・パーリツィン¹³と会見し、彼の下で見習僧になる。そこで、パーリツィンは師の命令として、ポジャルスキー公の義勇軍に加われと言い、ユーリーは歓喜してモスクワへ向かう。途中、正教会の司祭エレメイを頭目とするパルチザンに遭遇し、そこにヒロインのアナスタシアが囚われの身として現われる。パルチザンの農民は裏切り者の貴族の娘を殺せと叫ぶ。そこで司祭エレメイは一計を案じ、ユーリーとアナスタシアを結婚させ、いまや彼女は裏切り者の娘でなく、ミロスラフスキーの妻(亡きユーリーの父は民衆に慕われていたニジニ・ノヴゴロドの軍司令官だった)だ、と宣言し難を逃れる。その後、ユーリーはポジャルスキー公の軍勢のもとでモスクワ解放の戦いに参加し、大動乱時代は幕を閉じる。エピローグでは、30年後のセルギイ大修道院の祝祭で、キルシャはアレクセイに再会する。キルシャはユーリーの消息を尋ねるが、その傍らには、動乱終結から10年後の1622年にユーリーが妻と共に同じ日に、仲睦まじく死んだことを物語る墓石があった。

3. 主人公ユーリー

本稿で考察の中心にするのはザポロージェ・コサックのキルシャであるが、その前に主人公ユーリーについて述べておく必要がある。この物語の根底にはロシアとポーランドの文化的・精神的対立と、ロシアの愛国的原理の勝利という図式がある。この教訓的な傾向をもった歴史小説の中で¹⁴、主人公は理想的な「ロシア人」として描かれる。その際、共に行動し、献身的に尽くすコサックのキルシャもまた、良き「ロシア人」の一端として表現される。1612年のロシア人の諸身分が団結により勝利したという神話に沿うなら（例えば、ポジャルスキーとミーニ

¹³ Авраамий Палицын (?-1626) セルギエフ修道院の食料担当僧(келарь)。1610年末にポーランドがモスクワを占領して以降、モスクワ総主教ゲルモーゲンと共に、国土の解放を呼びかける回状を各地に出し、国民軍の形成に重要な役割を果たした。

Авраамий (Палицын) / Русский биографический словарь // Под ред. А. А. Половцова. Т.1. СПб., 1896, С. 40-43.

¹⁴ С. Петровは、30年代前半の歴史小説には2つの異なる方向—すなわち、ザゴスキ、ブルガーリンらをはじめとする教訓的な方向と、ポレヴォーイ、ラジェーチニコフ、ヴェリトマンなどのロマンチックな方向があると分類している。Петров С. М. Русский исторический роман XIX века. М., 1984. С. 47, 48.

ンに象徴されるように)¹⁵、ユーリー、キルシャが相互補完的に「ロシア人」を形成していると仮定することができる。そこで、キルシャの前に相補的な主人公ユーリーについて考察することは有用であると思われる。

主人公ユーリーは善良さ、自制心、愛国心といった長所を備えた人物である。以下、関連する作中の描写を提示する。

第1部の冒頭から、ユーリーは情が深い人物として性格づけられている。猛吹雪の中召使のアレクセイを気遣い、これ以上危険になったらお前だけでも助かるように告げ、さらに行き倒れていたキルシャを救出するのが、作中の最初の行動である。ユーリーの人の良さは、外見や動作にも表出し、立ち寄った旅籠屋の主人、女将、銃兵、商人、警吏からなる庶民の集まりに好ましい印象を与える。

〈ユーリーの〉大きな青色の眼に、勇敢さと善良さが輝いていた。テーブルに向かいつつ、彼は挨拶と一緒に笑顔を振りまいた。そこには素晴らしい親切さが表れていたもので、赤茶けた警吏をも含む全ての旅人が腰を上げ、「ようこそ、旦那様、ようこそ！」と声を一にした。(C. 50.) < 内筆者

ちなみに、ここでの「赤茶けた警吏」は後にユーリーに危害を加えるシャロンスキーの手下の悪党として登場し、因果応報として死の結末を迎える。

シャロンスキー邸でポーランド貴族と、親ポーランド派のロシア貴族らが宴会に出席した場面では、理性を失った騒ぎに嫌悪感を覚えると共に、彼の信仰心が明らかにされる。

〈飲み騒ぐ貴族たちと〉反対に、家では幼いころから父の敬虔さに慣れ親しんでいたユーリーは、ただ自分の部屋に帰る良い頃合いを待っていた。

(…)

彼は、神の似姿として創造された人間が、このような程度にまで墮落してしまうとは考えたことはなかった。(C. 128.)

一方で、祖国と民衆を想う強さと、それを主張して憚らない態度は、ポーランド支配を支持するロシア貴族と対立する。当時ポーランドに抵抗していたスモレンスクの陥落を祝い、シャ

¹⁵ ポジャルスキーとミーニンはロシアの社会層の団結の象徴として祖国戦争期に喧伝されていた。例えば、ナポレオン軍のロシア侵攻に際して、1812年7月6日の義勇軍を求める声明では、あらゆる身分の臣民が一体になることを強調するためにポジャルスキー、ミーニンの名を出しスムータの記憶を喚起した(池本今日子「1812年の退却とアレクサンドル1世の声明：「ナロードの戦争考」」、『ロシア史研究』第93号、2013、12-13頁)。

ロンスキーは「スモレンスクの勝利者の健康のために」乾杯する。自分以外の人間が飲む中、ユーリーだけが、「私は敵が破れたときは飲みますが、スモレンスクの民はロシア人で、我らが兄弟です」と言って拒否する。次にシャロンスキーは、「ポーランド王であり、ロシアのツァーリである（傍点筆者）」ポーランド王、ジグムントに乾杯、と呼びかける（C. 121）。対してユーリーは、次のようにやり返す。

シャロンスキー殿、あなたは我々にロシアのツァーリのために乾杯しようと提案しました。ですので、法により選ばれしツァーリであるヴラディスワフに、そして全て祖国の敵と裏切り者の破滅に乾杯！（C. 122.）

ここでユーリーが主張するのは、ポーランド王子ヴラディスワフが正教に改宗するという約束を基に、ツァーリとして認めたのであって（ただし結局改宗しなかった）、ポーランド王ジグムントや、ポーランド貴族に服従したのではないということである。この曖昧な立場により、ポーランド派のシャロンスキー、反ポーランド派のニジニ・ノヴゴロドの貴族両方から白い目で見られることになる。

最後に、彼の肯定的であると同時に否定的とも取れる特徴は（作中で非難を受けないが）彼の受動性である。彼は主体的に自分の葛藤を解決しようとはしない。ヴラディスワフに対する宣誓に後悔はしながらも服従することを選び、恋した相手が唾棄すべきシャロンスキーの娘と知っても、ただただ苦しむばかりである。そして、修道院に入るという決断は、彼の受動性を示す最たるものであろう。

あなた方は自由です。あなた方は外国人に宣誓をしておりません。でも私は、私は自分の意志でヴラディスワフの僕になると誓ったのです。私はあなた方と死ぬことはできません！ しかし武器がなくとも、祈りによって皆さんの神聖で偉大な仕事に参加します。ニジェゴロドの市民のみなさん！ 私は聖セルゲイ修道院に向かいます。そこで修道僧の服をまとい、聖者の棺のそばで、神がルーシの王国を滅びからお救いになるよう日夜祈ります。（C. 186.）

ところで、ユーリーの性格と運命は、バフチンが述べる古代ギリシャの冒険小説の形式と興味深い類似点を持つ。彼によると、それはウォルター・スコットの歴史小説においても生き延びているという¹⁶。ギリシャ冒険小説における人間像は「**受動的**で絶対に**不変**」でしかありえな

¹⁶ ミハイル・バフチン、（北岡誠司訳）『小説における時間と空間の諸形式——歴史詩学概説』「ミハイル・バフチン全著作第5巻」水声社、2001年、162頁。

い。主人公は「強いられておこなう空間のなかでの移動」において、「自己同一性の有無を試す試練」が与えられるが、自己同一性を変えることなく保持する。「事件の大槌は、何ものをも砕かず、何ものをも鍛え上げない。それは、ただ、でき上がっている製品の堅牢さを試すだけである」¹⁷（太字は訳文ママ）。こうした特徴に沿うように、ユーリーは物語の中で内面的な成長や変化はない。物語序盤の数章で描かれる彼の特徴は、出来事に応じて形を変えて繰り返されるに過ぎない。祖国のために殉ずる道として、俗世を捨てることで、誓いを放棄することなく祖国に奉仕する道を選ぶ。貴族に信用されまいが、途中でアナスタシアと晴れて結婚しようが、自らを失うことなく祖国の救済に向かう。

若く、高潔さを保ち、善良であるものの、旅を強いられ、二つの陣営の間をさまよう主人公は、ウォルター・スコットのスコットランドを題材にした小説にしばしば表れる特徴であることは指摘されており¹⁸、ザゴスキンはその形式を模倣したと考えられる。しかし、主人公の性格は作品の肯定的な評価には結びつかなかった。例えば、長年ザゴスキンと交流があり、彼を高く評価していたセルゲイ・アクサーコフは「歴史的な事件や人物が巧みな筋の枠内にはめられ、見事に、また忠実に歴史の光に照らされている」として¹⁹、物語の面白さと過去の再現性を評価したが、以下のように認めざるを得なかった。

ユーリーは非常に善良で、高潔で、勇敢な人間であるが、彼に対してそれほど激しい愛着はもてないことを認めざるを得ない。彼は誰かと行動を始めるやいなや、二級の人物になってしまう。彼には非常に良いもの、強いもの、惹きつけるもの、独自のものがない。彼は救われ、遣いに出され、解放され、耳を傾けてはもらえず、許され、結婚する。ある意味で、キルシャのほうかはるかに好ましい²⁰。

ユーリーのような理性的・教訓的な主人公は、すでにセンチメンタリズムを体験して久しく、激しい自我を持つロマン主義的形象に親しんでいた当時のロシア人にとって、ひどく古くさく感じられたに違いない。

¹⁷ 同上、175-180 頁。

¹⁸ *Альтишуллер М. Г. Эпоха Вальтера Скотта в России. Исторический роман 1830-х годов.* СПб., 1996, С. 16-17.

¹⁹ *Аксаков С. Т. Собрание сочинений в четырех томах*, Т.3. М., 1956. С. 497.

²⁰ Там же. С. 500.

4. コサックのキルシャについて

作中でユーリーに次いで物語の中心になるのが、ザボロージェ・コサックのキルシャである。以下は彼との出会いの場面の場面である。

灰色の農民外套を身に着け、腰にした斑色で幅の広い革ベルトのおかげで、トルコの短剣^{キンジャル}の取手のように見えた人間が雪の上に横たわっていた。背中には、ラシャの袋に入った長めのライフル銃が掛けられ、右脇から腰にかけて太いコサックの鞭が結び付けられていた。ふかふかした縁のついたタタール風の帽子が彼の頭そばに置いてあった。(C. 39.)

ユーリーと召使アレクセイに抱えられたこの人物は馬の方に引っ張られる。すると、

突然生き返り、何か本能のように、彼らの助けなしに鞍にまたがって、手綱を取った。そして、じっと動かぬ彼の眼には生命力が燃えたぎり、意識を失った顔に澆刺とした喜びが浮かんた。(C. 40)

外見描写の「トルコの短剣」、「コサックの鞭」、「タタール風の帽子」という単語は、ロシア人にとって異質な他者性を示唆し、乗馬の際の蘇生は、彼がお伽噺のような力強いコサックであることを読者に印象付ける。生き返った彼が放つ第一声は歌であり、歌うことによって自分の無事をユーリーたちに伝えた。

おお、海よ、青い海よ！
お前は、益荒男どものばか騒ぎの如し
さよなら、わが愛しの、
麗しき乙女よ！
優しい手でかき乱すなよ
おまえの真っ赤な頬を
益荒男ならばかき乱すよ
俺にゃ広い權をもって
母なるヴォルガを… (C. 41.)

ヴォルガと權という単語から、ステンカ・ラージンの歌のごとく、海賊行為に向かうコサックを歌っているものとして推測される。この歌により、彼はフォークロアの世界と一層強く結び付けられる。

その後、彼がツァーリツィン（ヴォルゴグラードの旧名）の生まれで、ザポロージェ・コサックに仲間入りしたこと、バトゥーリンでコサックとして勤務していたこと、平のコサックではなく、兄弟が兵營の首領であり、叔父がザポロージェ・コサックの軍団長であったことを語る²¹（C. 42-43.）。先行研究の視点に則るなら、ウクライナに位置するザポロージェ・コサックという経歴と、ロシアの内であるツァーリツィンの生まれにより、キルシャはロシア人にとっての自己／他者性を包含している。歌の中にも現われるような女性を拒絶する態度や言い回しは、この後も作中でたびたび見られる。これはゴーゴリが『タラス・ブーリバ』で強調するウクライナのザポロージェ・コサックの性格付けの一つであるが²²、ここではあくまでも「母なるヴォルガ」というロシアの伝統と結びついていることに注目したい。

キルシャが語るところでは、ここ2年程実入りもなくさまよっていたが、ニジニ・ノヴゴロドで密かに軍隊が集められているというので、運試しをしに向かっていたところであった。「ザポロージェ人は自由人で、仕えたい人に仕える」（C. 43）こと、ポーランド王にすら仕える義務はなく、自分たちは放蕩をするものの、正教会の建物を焼打ちするポーランド人とは違うことを熱弁し、『タラス・ブーリバ』に見られる正教への献身、反ポーランド感情というザポロージェ・コサックの特性を明確に示す。

その後、恩を感じたキルシャは様々な場面でユーリーを助ける。『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』においては、主人公ユーリーが登場せず、キルシャの行動に視点が置かれる章が少なからぬ割合を占める。以下、キルシャが中心の章について簡単に述べる。

第1部（全10章）

5章 ユーリーの命を狙うごろつきから、囹となり、逃げ延びる。

6章 逃げ落ちて身を隠した百姓小屋で、村の結婚式で行われる魔法使い（実はいかさま師）の陰謀を聞く。

7章 陰謀を事前に暴いたことで、農民たちの間で自分が魔法使いだと称えられる。

9章 凄腕の魔法使いとして、アナスタシアの病気の治療（実はユーリーを想う恋の病）のために、シャロンスキーの館に招かれる。キルシャは彼女の悩みをずばり当て（これも盗み聞きして知っていた）、信頼を得る。彼女はポーランド貴族と婚約させられていたのだが、今結婚のためにモスクワに向かうと、アナスタシアは呪いで死ぬことになるだろうとシャロンスキーを脅し、結婚を延期させる。

²¹ ザポロージェ・コサックはドニエプル川下流の川中島に要塞化した本営（сечь）を築いた。構成員は多数の兵營（курень）に分かれ自分たちの首領（атаман）を選んだ。さらに、本営を取り仕切る軍団長を кошевой, あるいは кошевой атаман と呼んだ。また、本営は女性禁制であった。

²² Kornblatt, pp. 61-63.

第2部（全5章）

- 1章 シャロンスキーがユーリーに刺客を送っていることを盗み聞きで知る。キルシャはアナスタシアの治療の褒美としてもらった暴れ馬と格闘し手なづけて、自分を引き留めようとしていたシャロンスキーのもとから脱出する。
- 2章 事前に盗み聞きしたことで知っていた刺客の襲来からユーリーを守る。

第3部（全9章）

- 1～3章 シャロンスキーのもとに囚われていたユーリーを探すべく、ユーリーを襲った刺客から居場所を聞き出し、救出に成功する。

上記の通り、キルシャは主人公を何度も危機から救うだけでなく、恋のキューピット役まで演じることになる。本稿では詳しく述べないが、キルシャの冒険(盗み聞きからの陰謀の暴露、魔法使いを騙る機知、暴れ馬との格闘等が)『ユーリー・ミロスラフスキー』に物語としての面白さや意外性を与えている。

キルシャの性格には粗野な面もあるが、義理人情に厚く、受けた恩は決して忘れない。第2部の冒頭、キルシャが中心の場面において、彼の人物像については次のように説明されている。

キルシャは巧みな騎手で、喧嘩して、酒を飲んで、狼藉を働くことを好んでいた。しかし、彼は戦いの熱の最中でさえも武器を持たぬ敵に情けをかけた。その上自分の仲間がやるように敵で気晴らしをすることはなかった。つまり、耳も鼻も切り取ったりせず、ただ足の先から頭まですべて分捕って、シャツ一枚だけを残してやり、どこへなりとも解放したのである。実のところ、身を引き裂く厳寒の冬にもそうしてしまうことがあったが、代わりに、夏も同じ情けを相手にかけてやった。彼のことをキルシャ神父とあだ名をつけ、ザポロージェ・コサックではなく、女だ、と言ってくる同僚からの嘲笑に辛抱強く耐えた。もたらされた侮辱には永久に復讐し、施された善行は決して忘れない。この決まりに、生涯キルシャは背かなかった。(C. 129-130.)

この引用部分が示すのは、第一に、ザポロージェ・コサックの粗野な風習・価値観である。キルシャは物語中においても度々酒を飲み、暴れ馬を飼いならすなどアウトローなコサックの特徴を存分に発揮している。引用した箇所以外でも、作中では酒と馬に対する好み、女性に対する軽蔑を見せる。第二に、キルシャの例外性である。敵に情けをかける性格のせいで、過去には味方内で軽蔑の対象になっており、コサック内ではぐれ者であったことが語られている。彼は仲間のコサックと同じく略奪行為には精を出す、最低限の慈悲を持ち、忠義に厚い。主

人公を助けるのはザポロージェ・コサックの性分からではなく、彼固有の情の厚さによるものであった。

ここに、『タラス・ブーリバ』のコサックとキルシャの共通点・相違点がある。共通するのは、両者とも善悪混在した両面的な価値をもっていることである。本来否定的な価値をもつ放埒さや略奪者という側面は、別の肯定的な要素（剛胆さ、生命力、敬虔さ等）と結びつくことで、特別な魅力を生じることになる。相違点は、『タラス・ブーリバ』ではザポロージェ・コサックという集団全体を栄光化しているに対し、キルシャは集団の中の逸脱者に過ぎないことである。

ゴーゴリの場合、視点は常にコサックの側に立ち、彼らの暴力までも含めた価値観を認め、抑圧者との戦いを背景に、栄光化する。さらにコサックとロシア人の性質は、深いレベルで結びつく。過去のコサックと、ゴーゴリが生きた時代のロシアとの連続性を物語るのは、物語の最終局面でタラス・ブーリバがポーランド軍に捕えられ、火刑を受けながら発する台詞である。

悪魔の子のポーランドのやつら、うぬらはいったい何を得たのじゃ？ われわれコサックの恐れるものが、この世にあると思うのか？ まあ、待ってるがいい、そのうちに時節が来て、わがロシアの正教の信仰がいかなるものであるかということを、うぬらもやがて知ることになるのじゃ！ もう現在でさえ遠近の諸国民がそれを感じているのじゃ——わがロシアの国土、ロシア国土自身の皇帝が生まれ出る。そしてこの君に征服されぬような力は、この世になくなってしまふのじゃ！²³

一方で、ザゴスキンの価値を認めるのは主人公ユーリーに象徴される善良さ、理性、忍耐といった、18世紀の啓蒙主義的な価値観である。ゴーゴリとは違い、コサックという特異な価値観を持った集団からやや距離をおいたキルシャにこそ、主人公の支援者としての資格が与えられるのである。物語の最後の場面でモスクワが解放されると、キルシャは召使アレクセイに向かって、「お前のとこの旦那と奥さんを見たら、ずっと独身のザポロージェ・コサックでいる気持ちが失ってしまった。」(C. 278) と言って、コサックの本営に戻らず嫁を探しに行くと行って去ってしまう。ザポロージェ・コサックが良きロシア人たるユーリーの価値観に近づくことで物語は締めくくられるため、ゴーゴリに見られるようなコサック賛美は成立しない。むしろキルシャとロシア人貴族の間には上下関係のようなものがあり、ユーリーはキルシャの度重なる奉仕に感謝しても、特別に尊敬の念を抱くことはない。

ちなみに先行研究では、ロシア人／コサック間の壁が、プーシキン『大尉の娘』(1836)にも指摘されている。ただしここでは、コサックがロシア人に接近する余地はない。主人公の青年貴族グリニョーフは、過去に行った施しの返礼として自分を助けてくれるプガチョーフの人柄

²³ ニコライ・ゴーゴリ（原久一郎訳）『隊長ブーリバ』、潮出版社、2000年、217頁。

に魅力を感じつつも、反乱の首謀者に対して、貴族の立場からアイロニカルな視線を投げかけている。それゆえ、この作品は完全に「神話」的とはいえないとコーンブラットは述べる。主人公とプガチョーフの間の壁を象徴するのが、プガチョーフがモスクワへ攻め込む野心を語った後に放った台詞である²⁴。

「君におとぎ話をして聞かせよう。わしが子供のころ、カルムイク人のおばあさんが話してくれたんだ。ある時鷲がからすにたずねた『ねえ、からす君、君がこの世に三百年も生きられるというのに、おれは全部合わせたって三十と三年しか生きられないのはどうしてだ?』からすは答えていった『それはなあ、とつつあん、あんたが生き血を飲んで、私が屍骸を食べているからさ』。鷲はそこで考えた『ではひとつやってみよう、同じものを食べてみよう』。よかろう。鷲とからすは飛んで行った。すると倒れた馬を遠くから見かけた。舞い降りて、とまったのさ。からすはつつつき始めて、うまいうまいと言った。鷲は一度つつつき、二度つつつきしてみても羽ばたきをするとからすに言ったとき『だめだよ、からすの兄弟。腐った肉を三百年も食うよりは、一度でも生きた血をたっぷり飲んだ方がましさ。あとは運を天に任せるだけだ!』とね。このカルムイクのおとぎ話はどうかね?」

「気がきいてますね」と私は彼に答えた「ですが人殺しや略奪をして生きてくのは、僕から見れば屍骸をつつくのと一緒ですね」

プガチョーフは驚いたように私の顔を見て、何の返事もしなかった。二人ともだまりこんで、それぞれ自分の物思いに沈んでいった²⁵。

お伽噺の中で鷲に例えられたコサックの冒険的な生き方に対して、主人公はロシア人貴族の立場を崩すことはない。

このように、主人公とロマンチックなコサックの間の距離により、『ユーリー・ミロスラフスキー』、『大尉の娘』は、ゴーゴリの作品のようにコサックが「鼓舞するような自己定義の神話」²⁶を与えてくれるわけではない。コサック・イメージの発展の歴史という観点からは、キルシャの物語中の八面六臂の活躍、フォークロア的な超人性、良きロシア人たる主人公との結合は、後の『タラス・ブーリバ』における「神話」的コサックに繋がるといえるだろう。しかし、作者あるいは主人公の価値観がコサック性を受け入れようとはしないために、たとえ作中で劇的な役割をキルシャが果たしても、無意識で承認されるポジティブな「神話」の領域にまで達し

²⁴ Kornblatt, pp. 36-38.

²⁵ アレクサンドル・セルゲービッチ・プーシキン(川端香男里訳)『大尉の娘』, 未知谷, 2013年, 176-177頁。

²⁶ Kornblatt, p. 19.

ない。さらに、次に述べる「歴史的」コサックたちのとの対比が、キルシャを単なるフィクション上の人物のレベルにとどまらせることになる。

5. 動乱期のコサック・イメージとキルシャ

コサックの中の例外的存在して理想化されたキルシャは、作中の動乱期という時代の反映として描かれている「歴史的」コサックとの対照的な性格を示す。両者が対立するのは、1612年10月22日モスクワの解放をめぐる戦いの場面である。ここではトルベツコイ公²⁷の軍勢と、ユーリーとキルシャが所属するポジャルスキー公の軍勢の両方にコサックが登場するが、両者は対照的に描かれている。

50人ほどのコサックが、燃えている薪の周りに気楽に陣取り、酒を回し飲みしながら熱気盛んに騒ぎ叫び、ポジャルスキー公と共にニジニ・ノヴゴロドからやって来た義勇軍に悪口雑言を浴びせていた。

(…)

上官が現れても、誰もその場から動かなかった。通りかかった指揮官らの後ろで粗野な嘲笑のことばや、侮辱的なあだ名を叫んでいた。叫ばれた側の無関心は、彼らがこうした放縦な振る舞いにすでに慣れきっていることを証明していた。

(…)

この軍団からちょっと離れたところに、別の500人の騎兵が佇んでいた。この中にもコサックの姿は認められた。しかし、規律、保たれた静けさ、持ち場では常に臨戦態勢の上官に対する敬意——これら全てが、それほど大きくないこの部隊が、トルベツコイ公に属する軍団ではないことを証明していた。(C. 262-263.)

ここでは、ポジャルスキー公のもとの団結したニジニ・ノヴゴロドの義勇軍と、無秩序なトルベツコイ公のコサックたちとが性格において互いに分離していることが描かれる。後者のコサックの利己的な態度は、戦闘が始まるとさらに明確になる。

²⁷ Трубецкой, Дмитрий Тимофеевич (?-1625) 動乱期のロシアの軍人、公爵。1610年10月、コサックの頭目ザルツキー、リャザンの軍司令官リャプノフと共に第1次国民軍を組織。1611年春、ポーランドが支配するモスクワを攻撃、敵勢力をクレムリンとキタイ・ゴロドに押し込めることに成功。ポジャルスキーら第2次国民軍到着後には彼らと連合し、コサック部隊を率いてクレムリンの守備隊を破った。

Трубецкой Дмитрий Тимофеевич / Новая Российская энциклопедия // Под ред. А. Д. Некипелова и др. Т. 16 (2). М., 2016, С. 184-185.

その結果がモスクワだけでなく全ロシアの運命を握っていた、凄惨かつ絶望的な戦いを、ただ数百人ほどのコサックは、好奇心から家の屋根に上って、見世物でも見るかのように眺めていた。(C. 264.)

戦闘が始まって数時間たっても、持ち場を動かないコサックたちの下に、ユーリーはポジャルスキー公の使いとしてトルベツコイ公と面会しようとするが、コサックの指揮官は官僚的な態度でユーリーを追い払おうとする。業を煮やした彼は、自分の部隊と共に「正教の信仰と聖なるロシアのために！」(C. 266.)と叫びながらモスクワ川を越えて敵に向かっていく。同じくもどかしさを感じていたキルシャは、ユーリーを助けるために、コサックを挑発することで戦いに駆り立てようとする。

我々こそ裏切り者じゃないのか？ 我々と同じロシア人の兄弟が、自分の血を流しているのに、俺たちはここで手をこまねいてじっとしている…俺にとっちゃポーランド人どもと一緒にの方がまだ誇れるさ！ だが我々はなんだ？ なんてことはない、女以下だ！ あいつらは神に祈るが、俺たちは何をしている？ ええ、友よ、我々はこんな侮辱には耐えられない！ (C. 266.)

この言葉に、歴史に名を残すコサックの首領(メジャコフ²⁸など)たちは心を動かされる。しかし、大多数のコサック兵たちは動こうとしない。その時、義勇軍がポーランド軍を押し始める。それを見たキルシャは、クレムリンの金銀財宝が彼らの手に渡ってしまうだろうとほのめかすと、コサックたちは飛び出していった。

このコサックたちのイメージは、歴史的知識に基づいたものだった。トルベツコイ公の下、「大部分が荒れ狂うコサックたちによって構成され、モスクワには祖国の防衛ではなく、収奪と稼ぎのためにやって来た」(C. 262.)部隊に関しては、ザゴスキンは注において年代記の記述を参照したとしている。19世紀に広く読まれ(ザゴスキンは注に参照していた)、文学作品に源泉を与えたカラムジンの『ロシア国家史』(1816-1829)の、動乱期を扱った部分では、特定のイデオロギーを持たず、利益に従って所属を転々としていたコサックが度々言及される。カラムジンは、動乱期の混沌状態——入りみだれる諸勢力と、個々の集団内の雑多さ——をポジャルスキー、ミーニン以前に結成された第一次国民軍の勢力の中に描いている。

²⁸ Феофилакт Межаков ドン・コサックの首領の一人。1612年のモスクワ解放戦に参加した。ツァーリを決める1613年の全国会議でも発言権を持ち、ミハイル・ロマノフを推薦した。Кузнецов В. С. Донское казачество в войнах по защите отечества (1618-1918г.г.), Симферополь, 1997. С. 53-54.

リャブノフと他の州の指揮官による軍勢は、実質的には軍人や非戦闘員の市民と、浮浪者・略奪者の奇妙な混成であった。後者らがこの災厄の時代にロシアを沸き立たせ、合法・非合法を問わず力を旗印に利益だけを求めた。彼らは以前にはポーランド人と共に略奪をしたが、善に味方するよりも変わらず略奪をし、さらなる混乱をもたらすために、今度はポーランド人に襲いかかった²⁹。

カラムジンがここで言及している「浮浪人 (бродягами)」や「略奪者 (хищниками)」の一端がコサックであった。混乱の時代という意味では、コサックは動乱期を象徴する存在であったといえる。『ロシア国家史』ではコサックが動乱期において、地方の農民反乱や、僭称者といった反政府勢力の構成要素として、「ポーランド人」「裏切り者」「悪党」と言った集団と並列されて言及される。以下はその一例である。

Беглецы, оправдывая себя, в рассказах своих умножали силы Самозванца, число Ляхов, Козаков и Российских изменников; (...) ³⁰

(偽ドミートリー二世に敗れた)敗走者たちの言い訳したところでは、僭称者の勢力、ポーランド人、コサック、ロシアの裏切り者たちの数が増していたという (…)

動乱期の混乱の象徴としてのコサックは、文学作品においても色濃く見られる。プーシキンの『ボリス・ゴドゥノフ』(1825)では、僭称者グリゴリー・オトレーピエフの下にドン・コサックのカレーラがうやうやしくはせ参じる。ところが、別の戦闘に敗北した場面ではザボロージェ・コサックを「裏切り者」「罰当たりども」「ならずもの」とののしる³¹。ここでは、僭称者にとってもコサックは信頼できる味方ではないことがほのめかされている。

プーシキン以前にも、デルジャーヴィンの史劇『ポジャルスキー、あるいはモスクワの解放』(1807、但し上演はされず)は1612年のモスクワ解放を描いている³²。ここでポジャルスキー公

²⁹ Карамзин Н. М. История государства Российского Т.12 // Полное собрание сочинений в восемнадцати томах. М., 2003, Т.12. С. 153-154.

³⁰ Там же. С. 123.

³¹ プーシキン (佐々木彰訳)『ボリス・ゴドゥノフ』, 岩波書店, 1957年, 65, 103頁。

³² 1800年代、祖国戦争の直前の対仏戦争(1806-07)を通じた愛国心の高まりをきっかけに、1612年のモスクワ解放を扱った史劇作品群が現れた。デルジャーヴィンもそうした作家の一人であった。Зорин А. Кормя двуглавого орла... Литература и государственная идеология в России в последней трети XVIII — первой трети XIX века. М.: НЛЮ, 2001. С. 159-161.

を阻止しようするのが、マリーナ・ムニーシェクと、彼女と婚約したザルツキーであった³³。この戯曲の序文において、デルジャーヴィンは史実でのザルツキーの行為に触れつつ、「ならば、彼を最も暗い色彩で、最悪の敵、裏切り者として描かずにいられようか？」³⁴と述べ、劇の魅力的な悪党として愛着を示している。このように、動乱期にコサックの「流動的」「裏切り者」「利己的」イメージは一種のスタンダードであったといえる。『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』でも、ザポロージェ・コサックといえば、召使アレクセイ曰く「略奪者」(C. 42)、「悪魔」(C. 67)であり、キルシャのやつも裏切って「強盗どもの頭」になる(C. 143)と考えられていた。

ザゴスキンは動乱期を象徴するコサックをトルベツコイ公の軍勢の中に描いたといえるが、それは理想化されたキルシャの性格とは対照的である。『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』では、ザポロージェ・コサックの価値観がロシア人の主人公とは完全には一致しない点で、ゴーゴリの神話的コサックとは異なることはすでに述べた。加えて、『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』では、歴史的知識に基づいたネガティブなコサックが登場することで、コサックが「神話」化されることが妨げられてしまっている。資料に依拠し、注を付けて説明を加えることで、1612年の利己的なコサックが「神話」という虚構ではなく、歴史事実として読者に提示されるのだ。さらに、歴史的知識を基にしたコサックから逸脱し、彼らと対立し、首尾よく説得してしまうキルシャは、皮肉なことに自身がリアリティを持たぬ架空の存在に過ぎないことを露呈してしまっているといえる。

おわりに

歴史小説である『ユーリー・ミロ斯拉フスキー』においては、ロマンチックな形象を持つザポロージェ・コサックのキルシャと、歴史的知識を基にしたトルベツコイ公配下のコサックという対照的なコサック・イメージが共存する。この物語は、2つの点で先行研究が述べるゴーゴリの「神話」とは異なっている。第一に、作中ではコサック的特徴に特別な共感が示されな

³³ マリーナ・ムニーシェクはポーランドの将軍の娘で、偽ドミートリー一世の妻であった。彼の死後、トウシノに現れた偽ドミートリー二世と結婚し、子供を設けるが、1610年に二世が死亡した後はザルツキーと結婚した。イヴァン・ザルツキーは、ドン・コサックの首領の一人で、動乱期には、反モスクワ勢力として様々な陣営を転々した。1611年2月には、リャプノフ、トルベツコイと共に第1次国民軍を組織するも、1612年に第2次国民軍がモスクワに迫った際、彼はそれには合流せず南方へ去り、1613-1614年モスクワに反旗を翻すためにアストラハンを占領。その後反撃に遭い、1614年5月にアストラハンを放棄、約1か月後に捕えられてマリーナ共々モスクワで処刑される。Заруцкий, Иван Мартынович// Большая российская энциклопедия, Т.10, 2008, С. 279-280.

³⁴ *Державин, Г. Р.* Сочинения с объяснительными примечаниями Я. К. Грота, Т.4. СПб., 1867, С. 133.

いこと、第二に動乱期のコサック全体の表象として描かれた、ネガティブなトルベツコイ公配下のコサックの存在のためである。プーシキン『大尉の娘』の場合と同じく、ウォルター・スコット風の歴史小説では、善悪混在したプガチョーフのような人物が登場したとしても、彼らに全面的な共感を示さない視点の存在が、物語の「神話」的要素を薄める。そして、歴史小説においては、現実の矛盾を想像力によって一面化しようという「神話」ではなく、ある時代の固有性の描写に価値が置かれたのだ。

むしろ、『ユーリー・ミロスラフスキー』にとって重要なのは、神話的なコサック像よりも、1612年の祖国解放の神話だったのではないだろうか。つまり、1812年の祖国戦争の如く、全てのロシアの階層が一致団結し、ロシアの精神性が勝利し、外敵を追い払ったという別の神話にザゴスキンはとりつかれていたのである。C.ペトロフ（1987）は動乱期の農民反乱を根拠に、ユーリーの如き地主階級と農民階級の平和的關係は歴史的正確さを欠き、ザゴスキンはロシアには西欧と異なり階級闘争がなく、ロシア人は常に正教とツァーリに仕えていたのだという反動的な思想をロシアの過去に投影していると述べている³⁵。この説明はソ連時代の研究者であるペトロフの社会主義的な歴史観に基づいているが、ザゴスキンは政治的に保守的な作家として1812年の愛国神話を強く意識していたことは、『ユーリー・ミロスラフスキー』に続いて『ロシアヴレフ、あるいは1812年のロシア人』を発表したことから疑いはないだろう。

（うえむら まさゆき・歴史地域文化学専攻）

参考文献

- アレクサンドル・セルゲービッチ・プーシキン（川端香男里訳）『大尉の娘』、未知谷、2013年。
池本今日子「1812年の退却とアレクサンドル1世の声明：「ナロードの戦争考」」、『ロシア史研究』第93号、2013年、3-24頁。
ニコライ・ゴゴリ（原久一郎訳）『隊長プーリバ』、潮出版社、2000年。
プーシキン（佐々木彰訳）『ボリス・ゴドゥノフ』、岩波書店、1957年。
ベリンスキー（森宏一訳）『ベリンスキー著作選集 I』、同時代社、1987年。
ミハイル・バフチン（北岡誠司訳）「小説における時間と空間の諸形式——歴史詩学概説」『ミハイル・バフチン全著作第5巻』水声社、2001年。

Judith Kornblatt, *The Cossack hero in Russian literature: a study in cultural mythology* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1992)

Susan Layton, "Nineteenth-Century Russian Mythologies of Caucasian Savagery," in *Russia's Orient: Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917*, ed. Daniel R. Brower and Edward J. Lazzerini (Bloomin-

³⁵ Петров С. М., Русский исторический роман..., С. 48-49.

gton and Indianapolis: Indiana UP, 2001), pp. 80–99.

Аксаков С. Т. Собрание сочинений в четырех томах, Т.3. М., 1956.

Альтишуллер М. Г. Эпоха Вальтера Скотта в России. Исторический роман 1830–х годов. СПб., 1996.

Державин, Г. Р. Сочинения с объяснительными примечаниями Я. К. Грота, Т.4. СПб., 1867.

Загоскин, М. Н. Юрий Милославский, или Русские в 1612 году // Сочинения в двух томах. М., 1987. Т.1.

Зорин А. Кормя двуглавого орла... Литература и государственная идеология в России в последней трети XVIII — первой трети XIX века. М.: НЛО, 2001.

Кузнецов В. С. Донское казачество в войнах по защите отечества (1618–1918г.г.), Симферополь, 1997.

Петров С. М. Русский исторический роман XIX века. М., 1984.

Большая российская энциклопедия, Т.10, М., 2008.

Новая Российская энциклопедия // Под ред. А. Д. Некипелова и др. Т. 16 (2). М., 2016.

Русский биографический словарь // Под ред. А. А. Половцова. Т.1. СПб., 1896.